ワインで考えるグローバリゼーション

山下範久著

■評者

亀井　克之

（関西大教授）

気鋭の歴史社会学者による待望のワイン書。日本ソムリエ協会認定ワインエキスパートの資格を持つ著者。ＮＨＫ『クローズアップ現代』に出演し「フランスワインの危機」について颯爽（さっそう）と解説したのは記憶に新しい。よくあるマニアックな銘柄や産地の解説本ではない。グローバリゼーションを主題として論じるにあたり、ワインという鏡に写すことで、その大きな時空を俯瞰（ふかん）し可視化しようという斬新な試みの書だ。

「価値の共有」が解決の糸口に

講義録のスタイルで、身近なワインを題材に、グローバリゼーションの代表的理論や構造が綴（つづ）られる。知らず知らずのうちにグローバリゼーションの主な枠組みを理解し、同時にワインの現状と課題を把握できる味わいのある一冊だ。

ワイン生産の「旧世界」と「新世界」、パーカーの批評に踊る「栽培・醸造技術」至上のグローバル主義と「テロワール」（畑の個性）至上の産地主義など、二項対立的に語られがちな既成概念を脱構築する。19世紀の後半、寄生虫フィロキセラの大流行で、ヨーロッパのぶどう畑は壊滅的打撃を受ける。以来、ワイン生産に科学が積極的に導入され、フランスにおける原産地呼称統制（ＡＯＣ）制度のような政府による規制システムが構築されてきた。「グローバリゼーションは、近代以前から、いくつものレベルで起こっている長い重層的な過程」であり、こうした「変化は過去の歴史というよりも、むしろ現在にまで続く変化の過程」だと捉（とら）える。

「産地の拡散」と「品種の収斂（しゅうれん）」という現状下、「世界のワイン産業の最大の課題は、グローバルなワインの過剰生産にいかに対処するか」にある。解決の糸口として、グローバリズムかテロワール主義かという「不毛なイデオロギー対立」ではなく、ワイン生産者と消費者とが互いに「価値の共有」の厚みを増すことを提案する。ワインが持つ「物語性」をどのように生産者が発信し、消費者がいかに想像力を働かせて受けとめるかがポイントだと言う。ワイン書の次回作が待ち遠しい。

（ＮＴＴ出版・1785円）